

ツォンカパと『量評釈』「量成就」章 k. 222ab について

木村 誠 司

I

ツォンカパ=ロプサンタクパ Tsong kha pa Blo bzang grags pa (1357-1419) は、多くの論理学書を学んだ、と伝えられている¹⁾。しかし、その伝承とは裏腹に、論理学を主要テーマとした彼の著作は、『七部入門、学究者の心の闇を払うもの』*sDe bdun la 'jug pa'i sgo don gnyer Yid kyi mun sel* と題する小品のみである²⁾。修学時代、熱心に論理学を学んだツォンカパと、その後たったひとつの小さな論理学書しか残さなかったツォンカパ。そこには、大きな落差があるように思われる。そして、その落差は、これまで取り沙汰されることもなかった。ツォンカパ伝の言うように、もし、ツォンカパが論理学を深く研鑽したのなら、彼はそこから、何かを学び取ったはずであろう。筆者は、その「何か」をわずかでも具体的に知りたい、と常々考えていた。本稿は、このような動機から書かれたささやかな報告である。

II

ツォンカパの直弟子ケードゥプジェニゲレクペルサンポ mKhas grub rje dGe legs dpal bzang po (1385-1438) によるツォンカパ伝『尊者偉大なるツォンカパの肴有なる伝記、信仰正道』*rJe btsun bla ma Tsong kha pa chen po'i ngo mtshar rmad du byung ba'i rnam par thar ba Dad pa'i 'jug ngogs* (以下『信仰正道』)³⁾ には、かなり具体的な記述がある。ケードゥプジェは、次のように論理学に開眼したかのようなツォンカパの姿を伝えている。

[師ツォンカパは、ダルマキールティ Dharmakīrti (600-660) 著]『量評釈』*rNam 'grel, Pramāṇavārttika* の解説たる [ウユクパ 'U yug pa (—1253)⁴⁾ 注]『正理

蔵』⁵⁾ *Rigs mdzod* を御覧になり (gjigs rtog mdzad)⁶⁾, 第二章 [=「量成就」*Pramāṇasiddhi*, *Tshad ma grub pa* 章] の個所の道 (lam, mārga) の設定を説示する個所を正しく御覧になることによって [それを] 機縁として, ダルマキールティの原典 (gzung lugs) と正理 (rigs pa, nyāya) の規矩に対して, 押さえようとしても押さえられない (mnan pas mi non pa) 力強い無量の信仰を起こされ⁷⁾…… (Ka, 17b¹⁻²)

この記述が事実だとするならば, ツォンカパの著作にも, これと付合するような痕跡が見つかるかもしれない。顕教に対するツォンカパの主要作品の中に, その痕跡を捜してみることにしよう。

III

筆者の調査によれば⁸⁾, ツォンカパ著 (A)『般若波羅密の教示の論書現觀莊嚴論付注の広説, 善説金鬘』*Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan 'grel pa dang bcas pa'i rgya cher bshad pa'i Legs bshad gser gyi phreng ba* (以下『善説金鬘』)・(B)『菩提道次第広論』*Byang chub Lam rim chen mo*・(C)『了義未了義を区別する論書, 善説心髓』*Drang ba dang nges pa'i don rnam par phye ba'i bstan bcos Legs bshad snying po*・(D)『根本中論頌般若の解説, 正理大海』*dBu ma rtsa ba'i tshig le'ur byed pa shes rab ces bya ba'i rnam bshad Rigs pa'i rgya mtsho* (以下『正理大海』)・(E)『偉大なる論書入中論の解説, 密意解明』*bsTan bcos chen po dBu ma la'jug pa'i rnam bshad dGongs pa rab gsal* において, インドの論理学書は, 合計 35 回引用され, そのうち, 33 回が『量評釈』からのものであった。そして, 33 回中, 19 回「量成就」章から引用されていた。ツォンカパに深い感銘を与えた『正理蔵』における <「量成就」章道の設定を説示する個所>とは, kk. 205-280 に対する注釈のことであろう⁹⁾。ツォンカパは, kk. 205-280 から 10 回引用を行っている。この引用状況は『信仰正道』の記述の正しさをうかがわせるものかもしれない。では, <道の設定を説示する個所>から 10 回引用されているうちのどの偈をツォンカパは重要視したのだろうか。引用回数の多さから言えば, 3 回引用されている k. 222ab であろう。このような数に頼った考察が一体どれほどの意味を持つのか明白ではないが, 本稿ではとりあえず k. 222ab に注目してみることにしよう。

さて, k. 222 ab は『善説金鬘』・『菩提道次第広論』・『正理大海』の三著に引

(68) ツォンカパと『量評釈』「量成就」章 k. 222 ab について (木村)

用されている。順に、31才、46才、50才の時の著作である。36才のいわゆる立教開宗をはさみ¹⁰⁾、約20年に渡ってツォンカパの心を探っていたのが、k. 222 ab であった、と言うのは早計に過ぎるであろうか。ともあれ、次に、それら三著において、k. 222 ab がどのように提示されているのか、見てみよう。

IV

始めに、k. 222 ab、ついでそれに対する『正理蔵』の注を紹介しておこう。

adūṣite 'sya viṣaye na śakyaṃ tasya varjanam /

'di yul sun phung med par ni / de spong bar ni nus ma yin /

この対象 (viṣaya, yul) を論破することなくして、それを排除 (varjana, spong ba) することはできない。

これを、ウユクパは次のように注釈する。

もし、我 (bdag, ātman) は過失のないもの (skyon med) であっても、それ [= 我] に対する貪着 (chags pa, sneha) は過失を有するもの (skyon can) なので、[貪着を] 排除すべきである、と言うならば……これ [すなわち] 貪着の対象である彼の我を論破することなくして、知 (yul can, viṣayin) たるそれ [= 貪着] を排除することはできない。(149b⁶-150a¹)

k. 222 ab は、「ある対象 A に対する貪着 A' の排除は、A の論破を前提としないかぎり不可能である」という論理を説く偈なのである。

さて、ツォンカパは『善説金鬘』において、この論理を用いて明解な批判を展開する。ツォンカパは言う。

外境論者 (Don smra) と唯識派 (rNam rig pa) は、所取・能取 (gzung 'dzin, grāhya-grāhaka) と自己認識 (rang rig, svasamvedana) が真実として存在しないもの (bden med) であると確定してから、その二つに対する執着 (zhen pa) が退くと認めない者達なのである、彼らにはその二つに執着する所知障 (shes sgrib, jñeyāvaraṇa) を排除することは出来ないことになるのである。その二つの対象は [彼らにとって] 勝義において成立しているからである。すなわち、『量評釈』において「これの……」と言われた如き否定論証 (gnod byed) すら、[彼らにとっては] 笑うべきものなのである。(Tsha, 188b¹⁻²)

k. 222 ab の論理は、『菩提道次第広論』において、さらに有効に生かされ、ツォンカパの批判の基礎理論となった。まず、批判相手の主張を見てみよう。

彼 [摩訶衍] に従うある者は、「二我に対する相執 (mtshan mar 'dzin pa) の対象に関する考察を多く行って、それから、知 (yul can) の執着 ('dzin pa) それを退けることは、犬を石によって追い払う (khyi rdo phyir 'brangs ba) のと同じく、戲論 (spros pa, prapañca) を外から断つ (phyi chod) ので、最初から、心を如何

なるものにも散乱しないように保持すること (sems gang du yang mi 'phro bar 'dzin pa) が〔肝心である。それは〕石を投げる手を最初から保持することと同じでそれを行うことだけによってそれら相執の対象に対する無散乱 (ma 'phro ba) が〔あることになり、そのことが〕一切の戲論を中から断つこと (nang nas gcod pa) なのである。したがって、見解 (lta ba, darśana) を確定する諸々の聖典 (lung, āgama) と正理を学ぶことは、言説の言葉の上だけを流離うこと (tha snyad pa'i tshig tsam la 'byams pa) なのである」と言うのである。(Pa, 468b⁴-469a¹)

実践至上主義とも言うべきこの主張の結論は、きわめて非常識かつ破壊的なものに思われるが、この仏教そのものを不用とするかのような恐ろしい結論は k. 222 ab と逆の理論—すなわち「ある対象 A に対する貪着 A' の排除は、A の論破によってではなく、A' を起こさないようにすることによって達成されるのである」—を基礎理論として導かれている。ツォンカパは、次のようにこの主張を痛烈に批判している。

これは、仏陀の聖言 (gsung rab) と六人の装飾¹¹⁾等の学者の典籍 (gzhung) 一切を廃棄する (spong ba) 下劣なる誤解 (log rtog gi tha chad) である。……「二我に対する相執の知 (blo) によって、〔二我は〕どのように執着されるのか、〔それはどのようなものなのか〕そのことを正しく考察し、清浄なる聖典と正理によって彼が執着するように〔二我は〕存在しないことに関して決定を導くことを通じて、迷乱 ('khul ba) の虚偽 (brdzun) を完膚なきまで粉碎すること (phugs rdib ba) が必要であるが、そのような決定を何も得ず、心を保持することだけ〔に専心する時〕、その時、二我という対象に〔心が〕散乱しないことはあろうけれども、それだけによって、二我の意味内容 (don) は理解されないのである。そうでないならば、〔ある人が〕深い眠りに陥ったり昏絶する等の時も、その二つ〔=二我〕に対して心の散乱はないので、彼らも無我を理解するという過大適用 (ha cang thal ba, atiprasaṅga) 〔の誤りが帰結すること〕になるのである。(Pa, 469a¹⁻⁴)

批判は、さらに続くが、上記の引用から、ツォンカパの批判内容は十分に理解出来よう¹²⁾。この批判は、知的考察を本質とするツォンカパ教学の中核にも関る重要な見解であると思われる¹³⁾。k. 222 ab は、この批判の教証として引用され (Pa, 470a²)、その理論はそこで有効に生かされている。こうして、k. 222 ab の理論は、知的考察を拒む実践至上主義者に対する批判の決め手として、ツォンカパにとって決定的な意味を持つものとなったのである¹⁴⁾。

ツォンカパは、『正理大海』においても、k. 222 ab を高く評価して次のように言う。

一般に〔『中論』の〕全章は、顛倒した (phyin ci log, viparīta) 知によって執着さ

(70) ツォンカパと『量評釈』『量成就』章 k.222 ab について (木村)

れた通りの対象が存在することに対する否定論証を説示してから、それ [=対象] の知の執着を退けるのであるが、特にこの章 [第十八章「我と法の考察」(bdag dang chos brtag pa)] において、有身見 ('jig lta, satkāyadr̥ṣṭi) によって執着された我それは、蘊 (phung po, skandha) と同一・別異 (gcig tha dad) いずれとして存在しているか、を考察し、対象を論破することを通じて、我と我所への執着を退けるのであると説かれ……『量評釈』においても「これの……」と説かれているので、すべての大学者 (shing rta chen po) はこの教義 (tshul, naya) に関して、お考えは同じ、調子 (dbyangs) は同じなのである¹⁵⁾。(Ba, 186²⁻⁵)

V

さて、筆者は以上によって、『量評釈』『量成就』章 k.222 ab は、ツォンカパがインド論理学書中最重要視した偈である、と結論を下したい思いに駆られるが、それには論証不足であり、本稿はひとつの報告にすぎないであろう。ただ次のように想像すること位は許されるのではないだろうか。「k.222 ab で説かれる論理は、悪しき実践至上主義を否定し、知的考察を信条としたツォンカパの心を魅了し続けつたのであり、『信仰正道』の記述は、その論理に開眼した喜びを伝えたものかもしれない」と¹⁶⁾。

注

- 1) ツォンカパの論理学学習については、以下の研究を参照のこと (A) 長尾雅人『西藏仏教研究』岩波書店 1954 pp. 61-62 (B) 山口瑞鳳『仏教史Ⅱ』チベット 山川出版 1983 pp. 256-257 (C) 立川武蔵「トゥカン『善説水晶鏡』ゲルク派章和訳(-)」山口瑞鳳監修『チベットの仏教と社会』春秋社 S.61 pp. 441-442 (D) ツルティム・ケサン 小谷信千代 共訳『アーラヤ識とマナ識の研究—クンシ・カンテル』文栄堂 S.61 p.7 (E) Kaschewsky, R., Das Leben des lamaistichen heiligen Tsong kha pa Blo-bzañ-grags-pa, Otto Harrassowitz, 1971, Tail, 1, p.80, pp.86-88, pp.96-97, pp.116-117
- 2) The Collected Works of rJe Tsoñ-kha-pa Blo-bzañ-grags-pa (タシルンボ版全集) vol.27, ed. by N.G.Demo 1977 所収
- 3) 前掲長尾本には、ケドゥブジエによるツォンカパ伝が「最も権威あるもの」との指摘あり。(p.37) 前掲ツルティム・小谷本 序論〔1〕では、『信仰正道』の内容が一部紹介されている。前掲 Kaschewsky 本は、ロブサンツルティム Blo bzang tshul khirms (1740-1810) によるツォンカパ伝の独訳であるが、その伝記には『信仰正道』からの引用があることが指摘されている。(pp.51-52) トゥカン Thu' bkwan (1737-1802) のツォンカパ伝にも『信仰正道』からの引用が確認されている、前掲立川論文 p.448 の注 59。『信仰正道』の抄訳もある、寺本婉雅「喇嘛教宗喀巴伝」仏

教史学 第一・二編 M. 44-45

- 4) ウユクパの没年については、福田洋一・石浜裕美子『西藏仏教宗義研究』第四巻 1986 p. 64 参照
- 5) 原文は rnam 'grel gyi rnam bshad rigs mdzod であり、この全文が書名なのかもしれない。「ウユクパ注である」と判断したのは、インド出版のウユクパ注の書名が『量評釈の注釈, 正理蔵』Tshad ma rnam 'grel gyi 'grel pa Rigs pa'i mdzod となっているためである。ウユクパ注は、チベットで大いに尊重されたらしい。Th. Stcherbatsky, *Buddhist Logic* vol.1, Dover Pub. 1962 (rep. of 1930) p. 56, L. W. J. van der Kuijp, *Contributions to the Development of Tibetan Buddhist Epistemology*, Franz Steiner 1983. p. 116 参照。なお、ウユクパの論理学に対する貢献 (『量決択』*Pramāṇavinīścaya* に代わって『量評釈』を論理学研究の中心としたこと) を紹介したものとして、羽田野伯猷「チベット仏教学の問題」『羽田野伯猷』チベット・インド集成第一巻 チベット篇 I』法蔵館 S. 61 p. 37 松本史朗「Sa skya paṇḍita の教学に関する一考察」日本西藏学会々報 第 24 号 1978 p. 7 がある。
- 6) gjigs rtod mdzod の訳については、松本史朗氏から御教示頂きました。
- 7) 前掲 Kuijp 本 (p. 116) には、次のような紹介がある。「ツォンカパは、ソナムタクパ bSod nams grags pa と共に、それ〔ウユクパ注〕の「量成就」章に対する注を読んだ時、すばらしき宗教体験をしたと言われている」Kuijp はこの紹介の出典を示していないが、『信仰正道』の記述と一致するように思われる。『信仰正道』には、ソタク bSod grags という名が提示されている。(Ka, 17a⁶) 注1) の (E) p. 88 参照。
- 8) 以下に引用表を提示する。(略号 SP『善説金鬘』・LR『菩提道次第広論』・LN『善説心髓』・RG『正理大海』・GR『密意解明』・PV『量評釈』・PVin『量決択』*Pramāṇviniścaya* ed. by T. Vetter・PS『集量論』*Pramāṇasamuccaya* ed. by M. Hattori)

SP	Tsa	33a ⁶	PV. II, 193ab
		33a ⁶ -33b ¹	PV. II, 193d-194ab
		35b ⁴	PV. II, 132cd
		77b ³⁻⁴	PV. II, 31cd-33ab
		196b ²	PV. III, 287ab
		203b ⁶	PV. II, 219cd-220ab
		282b ⁵⁻⁶	PV. II, 214d-215ab
		282b ⁶	PV. II, 253cd
		327b ⁵⁻⁶	PV. I, 220
		401b ²⁻³	PS. I, 6cd
		Tsha	125b ³
	137b ³⁻⁴		PV. I, 35
	186a ⁵		PVin. I, 55ab

(72)

ツォンカパと『量評釈』『量成就』章 k.222 ab について (木村)

		186b ⁴⁻⁵ 188b ²	PV. Ⅲ, 213ab PV. Ⅱ, 222ab
LR	Pa	8a ²⁻³ 140a ¹⁻² 140a ² 141b ¹⁻² 201b ⁵⁻⁶ 201b ⁶ 205b ²⁻³ 470a ²⁻³ 470b ² 473b ⁵	PV. Ⅱ, 132cd PV. Ⅱ, 193d-194ab PV. Ⅱ, 274ab PV. Ⅱ, 219cd-220ab PV. Ⅱ, 129cd PV. Ⅱ, 126 PV. Ⅱ, 132 PV. Ⅱ, 222-223ab PV. Ⅲ, 99cd PV. Ⅰ, 49ab
LN	Pha	29b ⁵⁻⁶ 29b ⁶ -30a ² 30a ³⁻⁴ 30a ⁴	PV. Ⅲ, 213 PV. Ⅲ, 214-215 PV. Ⅲ, 216 PV. Ⅲ, 4
RG	Ba	27b ²⁻³ 124a ¹⁻² 186 ⁴⁻⁵	PV. Ⅳ, 22bcd PV. Ⅱ, 204cd-205ab PV. Ⅱ, 222ab
GR	Ma	32a ⁵ 168a ¹ 174a ³⁻⁴	PV. Ⅱ, 253cd PV. Ⅰ, 239cd PV. Ⅲ, 502cd

- 9) Fukuda, Y. & Ishihama, Y. A Comparative Table of Sa-bcad of the Pramāṇavārttika, found in Tibetan Commentaries on the Pramāṇavārttika, The Toyo Bunko 1986 参照
- 10) ツォンカパの著作年代等については、長尾本 pp.53-61, ツルティム・小谷本 序論〔1〕, 山口瑞鳳「チベット仏教思想史」『岩波講座・東洋思想 第11巻 チベット仏教』1989年 pp.99-101・松本史朗「ツォンカパとゲルク派」『同』 pp.225-226 参照。ツルティム・小谷本は『善説金鬘』を32才『菩提道次第広論』を45才の時の著作とし、長尾本・山口論文・松本論文は、順に、31才、46才とする。袴谷憲昭氏は、ツルティム・小谷本の年代不備を指摘された。袴谷憲昭 書評・紹介「ツルティム・ケサン 小谷信千代共訳 ツォンカパ著『アーラヤ識とマナ識の研究』—クンシ・カンテル」仏教学セミナー 第45号 1987 p.73。
- 11) 長尾本注(389), 立川論文 注26に六人の名前が挙げられている。
- 12) この批判は、摩訶衍の「不思議」の教義に対するカマラシーラの批判を踏まえている。カマラシーラの批判については、注10)の山口論文 pp.46-48, 山口瑞鳳『チベ

ット 下』東京大学出版会, 1988pp. 207-217 参照

- 13) 注10)の松本論文 p. 224-258, 特に pp. 229-230, pp. 256-257 参照。次の結論部分の御意見は、この批判の本質をも明確にするものと思われる。「ツォンカパの中観思想は、一切の分別(判断)や主張や言語表現をもっぱら否定すべきものと見る一般的な仏教理解、今日の我が国の仏教学界をも覆いつくしている実在論的仏教理解に対する根本的な批判を含んでいる……彼は、無執着主義、相対主義を否定して、“これだけが真実である”とする絶対主義的仏教理解を打ち立てた」(pp. 256-257)
- 14) ツォンカパの批判は、ここでは非知性的な実践至上主義者に向けられているが、『善説金鬘』における批判相手が外境論者と唯識派であったことを考え合わせると次のような結論に到らざるを得ない。すなわち—それらすべての批判相手は、つまるところ、k. 222 ab と逆の論理によって貪着を排除しようとする者達なのである。したがって、唯識派等が、如何に精緻な教理体系を有していようとも、彼らは悪しき実践至上主義者と容易に結託し得るのである—このような観点に立てば、唯識派も、悪しき実践至上主義者と同列に批判されなければならない。なお、この点については、すでに山口瑞鳳博士による御指摘がある。前掲注12)の山口本 pp. 282-285。また袴谷憲昭氏はツォンカパの唯識批判の論理構造(実体論批判)に触れられた。袴谷憲昭 論評「京都学派批判」駒沢大学仏教学部論集 第17号 S. 61 p. 419-420
- 15) 原文 dbyangs gcig をとりあえずこのように訳したが、明確な意味はわからなかった。
- 16) ツォンカパの反禅定主義知性重視を明確に指摘したのものとして、袴谷憲昭 論評「小林秀雄『私の人生観』批判」駒沢大学仏教学部論集 第19号 S. 63 pp. 363-364 がある。袴谷氏は、さらに、ツォンカパの知性重視の面をダルマキールティとの関係から考慮し、「伝統的な現量 (pratyakṣa) 優位説を否定し、比量 (anumāna) 優位説を継承する」ツォンカパの立場を看破された。(袴谷憲昭 論評「批判としての学問」駒沢大学仏教学部論集 第18号 S. 62, p. 403, 同氏「チベットにおけるインド仏教の継承」『岩波講座 東洋思想 第11巻 チベット仏教』1989, pp. 136-141). 比量を重視するツォンカパの立場は、松本史朗氏によって『菩提道次第広論』において確認され文献的に証明された。(注10)の松本論文 p. 259 の注12)筆者は、比量重視という面でダルマキールティとツォンカパは軌を一にしていると考えているが、それにしてはダルマキールティに対するツォンカパの評価はそれほど高いものではないような気がする。中観至上主義のチベットにおいてツォンカパがダルマキールティの立場を唯識としていることはその一例であろう。(拙稿「ダルマキールティの思想的立場をめぐって—チベット仏教における解釈—」駒沢大学仏教学部研究紀要 第46号 S. 63 pp. 261-260) また、先に見たように k. 222 ab は『正理大海』において高く評価されているが、読みようによっては、中観思想と一致するという点で評価されているのであり、その独創性を認められているのではないようにも思われる。『菩提道次第広論』にもその傾向はある。(『入中論』と並列されている。長尾本 p. 364 参照) 筆者はここでツォンカパとダルマキールティを強引に結び付けようとするのではないが、両学僧の知性重視の立場を大事にしたいと思う。

(74) ツォンカパと『量評釈』『量成就』章 k. 222 ab について (木村)

使用テキスト

ダルマキールティ

Pramāṇavārttika ed. by Y. Miyasaka

ウユクパ

Tshad ma rnam 'grel gyi 'grel pa Rigs pa'i mdzod, 1982 Delhi

ツォンカパ (以下すべてタシルンポ版全集)

Legs bshad gser gyi phreng ba, vol. 25-27

Lam rin chen mo, vol. 19-20

Legs bshad snying po, vol. 21

Rigs pa'i rgya mtsho, vol. 23

dGongs pa rab gsal, vol. 24

ケードゥブジェ

Dad pa'i 'jug ngogs, vol. 1

(1989. 12. 17 脱稿)